

造園学体系論序説

思想史と文化価値論に照応して

松尾欣二

On System of Landscape Gardening

In Special Reference to thoughts
and Cultural Problems

Kinji MATSUO

The Japanese garden has been developed, the plan and the system of which has been supported by various thoughts of different ages (for example, Buddhist idea-Zen) since the Nara Era. In the Meiji Era, as the idea of Western garden was imported, a new style garden—half in Japanese and half in Western style—was born. People who live in densely populated zones in every Japanese city need the green belt. For this reason, Natural Park must be developed in Japan.

This paper deals with these problems systematically.

緒言

日本庭園は静態的に整形・写景・写意の三部門に分けて論じられている。¹⁾ この稿では庭園の意義を拡張解釈し、公園をふくましめると共に両者の周辺に及ぼし、これを造園と呼ぶこととし、造園を動態的に観賞・作庭・批判の三部門に分け、構造的にかつ弁証法的に論じることとする。

日本古庭園には古代思想（例えば禅）が写意的にあらわされて居る。²⁾ かくの如く形而上の問題が形而下的に表現された古庭園・古文化と現代思潮との関連にも論及することにする。

I. 造園の意義

造園には作庭の意味もあるが、ここにいう造園は造園学の対象となる人間の所産であって、具体的にいうと自然公園・都市公園・緑地・墓園・パークウェイ・街路樹の植栽・官公庁（学校をふくむ）の付属庭園・大中小庭園・前栽・壺庭・盆景・盆石・生花等が構造的にふくまれる。盆石は枯山水に似て非なるものとの説もあるが、³⁾ 類似性をもつものとして一応包含せしめる。但し造園の重心は公園・庭園にあるのであって、場合に依っては他の部門は軽く扱うこともあるし、捨象することもある。生花を入れたのは流行のオブジェ手法が作庭（和歌山県本王院庭園）に応用されている事実があるし、⁴⁾ また絵画とは異り実在物を使って具象化するという点に於て、両者は関連が深いからである。

凡そ人間の本性は自然を求めるものであるといわれ、造園学の根本理念はこの点に通じてい

なければならぬ。Falke は造園とは、「人工に征服された自然」であるといったそうであるが、⁵⁾ 人工と自然を征服という字句で結ぶことには賛しかねる。従ってこの稿では造園とは「人間が保健・休養及び教化の目的を以て生活環境を積極的に整備することをいう」と可なり広義に解することにする。

II. 思想と社会体制が造園に及ぼす影響

1. 庭園における静動の関係, 芸術作品の領域における静動の関係

庭園そのものは静的存在であるけれども、仔細に観察するならば、静動二態様に区分することができる。静態庭園の適例は竜安寺の石庭を以て最とする。そこには一切動きがない。官休庵露地(京都)の如く白砂を流れの姿に敷き、以て八紘九野の水を表現している⁶⁾ 枯山水の手法も一応静態とみなし得るが、その底流には水の流れという動態が意識されている。外国庭園或いは自然景観には噴水によって添景される場合が多いが、鏡の如き静ひつなレマン湖畔の静的景観もひとたび噴水の水柱を立てればたちまち動態となり、噴水の効果が如実に示される。

庭園の素材には水・土・木・石等があげられて居り、⁷⁾ 水が重要であることは噴水の例に示した通りである。外国における噴水は日本庭園の滝組みの落流に相当する。噴水はふき上げ、滝は落下する。折角の滝組みにも水なき場合には枯滝の石組みとなる。枯滝を生滝ならしめる為、ポンプ揚水しているのが金照閣旅舎庭園(秋田)であり、創設時生滝であったが現在では枯滝になっているのが大沢池池畔(京都)の名古曾の滝である。

植栽されている庭木も動態の要因をなす。山城盆地の中央にあって東山・西山さては男山までの青らんを借景にしていた桂離宮庭園も、庭周辺の庭木が高くなったため借景の価値に変化を来した。鳥海山を借景にしていた金照閣旅舎庭園も作庭後いくばくもならないのに同様の憂き目をみている。

動態庭園の著例は汐入庭である。旧芝離宮庭園はその園池を東京湾に通ぜしめ、海潮干満の動態を静ひつな園内で見られるように設計されている。⁸⁾

このように造園は動態的であるが故に、管理面において絵画・彫刻と著しく趣を異にしている。両者共に芸術作品であるが、絵画・彫刻は静態的であるに対し、庭園は動態的である。文化庁が文化財を保護する場合、両者の区分にけちめをつけざるをえないであろう。

カントはその著「判断力批判」に於て芸術を分類し、造形美術をわけて彫刻的芸術と絵画的芸術に区分し、庭園は後者に属せしめているが、⁹⁾ 筆者は上述の如く静・動の関係に区分する。

2. 芸術作品・文化財の成立と背景社会との関係

古庭園を始め絵画・彫刻・建築の如き芸術作品・文化財と、それが醸成された社会並びに社会を動かしている思想とのつながりを見逃すことはできない。唯物反権力の現代思潮の渦中から立って世界史を見渡すならば、いよいよその感が強くなる。

禅僧夢想国師並びに画聖雪州の作庭はしばらくおく。(背後に権力者の支援もあった) 義満の金閣寺・義政の銀閣寺を始め秀吉の三宝院等の多くの名園は、時の権力と切り離して考えることはできない。後述する江戸時代三大庭園(栗林・後楽・兼六)は現代では大衆に依って recreation の場に利用されているが、いうまでもなく封建制のもとで諸藩がその権力に基いて作庭したものである。庭園だけではない。大部分の文化財にはこのような性格がある。唯物反権力思想家はこれらの文化財に対して如何なる感懐を持ち、それを如何に整理しておられるであろうか。明治百年が批評される場合、随所にかかるギャップ・ジレンマが見出される。

唯物反権力の思想を露骨に示したのは中国文化革命の初期段階であった。血気にはやる若き紅衛兵は、古き中国文化の中心地北京において、価値高き多くの文化財を侮蔑した。幸にして意識的にか、無意識的にかすべての中国文化を損壊するに至らなかった。モスクワ川北岸の丘上にあるクレムリン宮殿は14世紀にドミトリー大公に依って建設されたもので、帝政権力の一大象徴であったが、現在ではソ連政府に依ってフルに利用されている。

文化と思想との関係はこのように複雑であるが、その調整は歴史哲学の次元に於て始めて理解されるであろう。

3. 造園の管理，文化価値論

価値高き名庭園並びに一般文化財は国または一般社会の保護を受けなければ管理に困窮する 경우가多い。絵画・彫刻等と比較して庭園・建築物（例えば古城）等は、それが動態的であるが故に管理が容易でない。大庭園の管理には数千万の経費を要する場合もあるという。戦後社会体制の変革に伴い、寺院庭園・私庭園のうち可なり名園であるにも拘らず、管理に窮し若干の観覧料を徴して漸く管理されている場合がある。価値高き文化財には何等かの処置が必要である。外国では関係者が共同して管理している場合がある。

文化行政充実の為、43年6月15日文化庁が発足した。古庭園も文化庁文化財保護部の庇護を直接にまた間接に受けねばならぬであろう。また都市公園は都市公園法に依って保護されている。最近岡山市運動公園内に於て武道館建設に端を發し、その基礎工事中に弥生式遺跡が発見された為急きよ工事が中止されその続行の可否をめぐり、文化審議会の裁定を待たねばならなくなっている。如何なる裁定があるにせよ、遺跡が持つ文化財としての価値と、公園が持つ大衆福祉のための価値と現代史の次元に於て比較校定し、政治的に決定されねばならぬ問題である。

雑誌『心』の余録¹⁰⁾に「ロダンはロダン、ブールデルはブールデルとして感嘆・礼讃すればよいのであって、むやみに比較評価すべきでない」と記されている。ロダン級の作品については当然である。処でノーベル賞を定めるような場合¹¹⁾ また学会賞を定めるような場合作品に対し甲乙をつけねばならないことは必至である。すべての庭園を文化財として保護することはできない。価値高くすぐれた庭園を選び出し特別に保護することになるであろう。そこに文化財の価値という問題がある。

さきにエジプトに於て、ダム建設に当り、3,300年前のラムセス二世の威容を示すアブシンベル神殿が水没するというので、水面上の位置に移されたことがあった。この石像は超世界的文化財であって、我が国における正倉院の如く絶対的な価値を持つ。さらばとすべての文化財に絶対的価値を付与することはできない。この事は古都問題に関連する（IV-4 参照）

III. 観賞造園学

造園学そのものには観賞の意味がふくまれている。しかも観賞の対象は古庭園に集中されている。明治以降特に戦後の造園は観賞よりもむしろ recreation の意義の方が強くなっている。最近には庭園観賞に関する出版が目立っているが、それらの著作は造園専門家¹²⁾ に依る場合もあるが、一般文化人としての史学者¹³⁾・作家¹⁴⁾ 等に依って執筆される場合もある。

庭園の観賞は特定数ヶの庭園に限定されるものではなく、庭園の位置する場所により、また作庭の時代により賞味の度が異なる。名園は地方にもあるが、古き都京都に集中している。そこで江戸期までの庭園の発展史をたどるべきであるが、我が国には観るべき庭は約 800 あるとも

いわれている。¹⁵⁾ これを追究しては整理がつかないので、本稿では手近な範囲で一応時代別に略述することにする。

1. 奈良・平安時代迄の庭園

この時代はおおらかの一語につきる時代であって、庭全体の面積も、池泉の面積も大きく、池面に竜頭げき首の舟をうかべ舟遊びが行なわれた。大沢池嵯峨院址庭園遺構・毛越寺址庭園遺構・平等院鳳凰堂庭園遺構等がこの時代のものである。

2. 鎌倉・吉野朝時代

前時代からこの時代にかけて仏教の影響を受けて浄土欣求の思想が高まり、作庭に反映して須弥山をつくり、心字池（西芳寺・南禅院）の手法が用いられている。心の字は「即心即仏」「以心伝心」等の心をとったものと思われる。夢想国師が活躍したのはこの時代であって、東光寺庭園（山梨）、西芳寺庭園の石組みのきびしさに禅の心がうかがわれる。

3. 室町時代

金閣寺庭園・銀閣寺庭園はこの時代に作庭されたものであり、日本造園史上最高峯の時代といわれる。武家書院または寺院・別荘に対する庭園の型式が始まり、竜安寺庭園の如き枯山水の型式が現われて来る。

4. 桃山時代

千利休等により茶道が興され、生花が始まる。茶席には茶庭即ち露地式庭園が必要であって、露地には灯笼・手水鉢・つくばい等が配せられた。遠州が作庭した頼久寺庭園（高梁市）ではつばき・さつきの刈込み手法が用いられている。

5. 江戸時代初期

この時代に修学院離宮・仙洞御所・桂離宮等の大庭園が造営されている。後水尾天皇が格別に作庭に興味をもたれていたため、そのもとで作庭家吉田織部・小堀遠州等が活躍した。宮廷三名園はその規模・内容共に破格のものであって、池泉・堂亭・木石等大小の accent を駆使し、夫々ケの大庭園にまとめられていることは驚嘆に値する処であり、作庭造園による造型美の極致ともいわれている。¹⁶⁾ ブルーノ・タウト氏が感嘆するのもうべなわれる。¹⁷⁾ この時代には西翁院澱見の席茶室（京都）の露地なども作られている。

6. 江戸時代中・後期

この時代には、栗林・後楽・兼六等の大庭園が藩主に依って作庭されている（V-I 参照）少林寺庭園（岡山）官休庵露地（京都）阿波十郎兵衛邸址庭園（徳島市外）等中小規模の庭園はこの時代のものである。

明治以降の造園（庭園・公園）は史学の区分でいえば、正に現代史に相当する部分であって、もはや観賞より recreation の域に移っているので、次節作庭園学で述べることにする。

IV. 作庭造園学

造園学の領域に於て観賞を遊離せしめると、必然的に作庭が合頭する。観賞造園は一般人向きであるに対し、作庭造園には観賞造園をふまえて専門化が要求される。従って学校教育においてはこの部門を重視すべきであり、社会の実務面での要請もこの点につながる。作庭造園を更に細別すれば造園計画と造園施工に分つことができるが、観賞造園と対置せしめる為一応作庭造園としておく。

我が国には古くから「作庭記」「築山庭造伝」等の作庭造園に関する指導書があった。現在

では作庭条件が複雑化しているので、古式の参考書のみでは律しきれない。そこで造園史の現代史版ともいうべき明治以降の造園及び戦後の造園を記し、作庭の現況を敘述することにより作庭造園学の位置付けを行なうこととする。

1. 明治以降の造園

明治維新と共に封建時代は去り、諸政一新されて明治6年1月布告により「古来の勝地、名人の旧跡等は万人偕楽の地として公園とすることとなった。かくて日本造園史上造園技術が大きな波の底で呻吟せねばならぬ時代が始まったのである。¹⁸⁾

明治初期の造園施工主の多くは政治の座にある権力者または富豪であって、旧藩時代の大邸宅の跡地を譲り受けて新営するが多かった。従って明治以前の庭園様式を踏襲して石組み・池泉をもくろむ場合もあったが、やがて洋風の整形様式をとり入れて和洋折衷の pattern が生れ、次いで純洋式の庭園が産れて来る。かえりみると、もはやこの時代には庭園の字句のみでは律し難く、公園をふくめて、造園という言葉が暗黙の中に通用するようになる。

明治36年に造られた日比谷公園が近代的都市公園として現われたのであるが、平安神宮造園(京都)ではその橋亭が示す如く、古庭園の残滓が感ぜられる。鶴舞公園(名古屋)を経て明治神宮外苑(東京都)の域に達すると、日本風土における洋風庭園の様式が一応成立する。¹⁹⁾

2. 戦後の造園

明治百年か戦後二十年かといわれる程戦後の二十年には社会の動きに変化があった。その波及は当然造園の面にもあらわれたのであったが、反面観賞造園を通して社会の動き・思想の動きを窺知することができるのである。

戦後人口の増大と民主大衆社会思想の伸展に *leisure, recreation* の思想を呼び、そこには必然的に庭園の在り方に変革をもたらし、この思想にそって現われたのが一連の各種公園である。既述の如く明治6年早くも公園設置の布告が出され、後に国立公園設置の請願提出等の事があって、昭和6年には国立公園法が施行され、この法律に基き国立公園が設定され、保護されて来た。

戦後昭和32年には自然公園法が施行せられ、この法律の対象とする自然公園はそのスケールに応じ、国立公園・国定公園及び都道府県立自然公園とされている。この法律により指定を受けた地域に対しては、一定の公園事業が行なわれ、且つ保護されることとなっている。国立公園名並びにその内容はここでは略す。

3. 都市計画と造園

都市計画の策定に当って公園・緑地更に広場等が必要であることはいうまでもない。都心部では一人当たり3㎡の緑地計画²⁰⁾の樹立は容易でなく、郊外大緑地をふくめて6㎡の緑地も保留しにくいので市民は *leisure, recreation* を求めて自然公園にあこがれる。人口過密国日本の風土²¹⁾における自然公園への特別の要請はこの点につながる。

都市再開発に伴いビルの高層化が進みつつあるが、高層化に伴う空地は当然道路或いは造園に供されなければならない。²²⁾ この場合特殊な pattern の造園が必要である。

古都に関する問題は次節に於て触れるが、それと類似して都市における文化財の扱いが都市再開発に当り問題になることがある。さきに東京に於て帝国ホテルの古建築の取りこわしが問題になったが、なお三菱旧一号館の処理が残されている。これらの問題についても造園実務家は何等かの意見を持つべきである。それは都市計画に関連するからであって、筆者は敢て造園技術者は都市計画・都市問題に積極的に参画されんことを期待する。昔名庭園を作庭した織

部・遠州の名は残されているが、それ以下の者はいわゆる山水河原者²³⁾として名をとどめていないことは残念である。

4. 古都問題と造園

古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法が昭和41年に施行されている。ここに古都というのは京都市・奈良市・鎌倉市等をいうのであり、歴史的風土とは歴史上意義を有する建築物・遺跡等が周囲の自然的環境と一体をなして古都における伝統と文化を具現し及び形成している土地の状況であると説明されている。

古都京都の駅前に一本の観光塔が建てられても、古都の風致に不調和を来す。また奈良春日野の風致²⁴⁾を温存せしめたいきは山々であるが、さらばとて日進月歩の躍進を続けている社会経済一般から古都を切り離し、足ふみさせることは不可能である。そこに現代史に照応して、文化財に対する価値判断の必要が生じて来る。(II-3参照)

さすがローマは世界の古都である。その再開発は我々に示唆する処が多い。

5. 大衆住宅と造園, 公共的建築に望ましき環境

数階或いはそれ以上高層のアパート居住者には各戸に庭園を保有することは不可能である。この場合盆景・盆栽に recreation を求めることもよいが、アパート居住者が協力して、ビル周辺の空地に造園することが望ましい。

個人住宅が密集していても、たとえ数坪・十数坪でも空地を保有し得る居住者は、その空地に創意をこらして造園(前栽)を作り、生活環境の四季の変化を楽しむよう大衆指導が望ましい。住宅用地には高きブロック塀をめぐらし、とざされた孤独の生活を楽しむ居住者も居るが、少なくともブロック塀を生け垣またはフェンスにおき替え、団地居住者が一団となって光と緑を共に楽しみ得るよう開かれた環境を作ることが望ましい。

この事は官公庁公共の建築についてもいいうことであって、既に都道府県・市町の庁舎並びに裁判所関係庁舎等の環境はその方向に向って整備されている。然るに真理の探究に沈潜する大学の建築物が、明治時代そのままの土塀でかこまれ、ゲートをかたく閉しうよう仕組まれていることは、理解しかねる。

6. 造園計画

(1) 造園の立地条件

鎌倉時代烟霞の性癖があった夢想国師は諸国を行脚し、その場所に応じて作庭を行なっている。立地的にみると、京都の名園西芳寺・銀閣寺・三宝院等は山裾に位置し、あの規模の作庭を行なうには好個の場所である。京都付近に古庭園が多いことは一つにはその風土に起因している。桂離宮と日光廟は同時代の建築であるにも拘らず、その様式を異にしていることが問題視されたが、²⁵⁾立地上それは当然のことであって、造園についても同様のことがいいうる。北欧オスロの町の公園フログネルにおかれている幾多の彫像は、かの国の気候と風土を如実にあらわしている。我が国人の感覚、我が国の風土と如何に異なるか、比較すれば面白い。

(2) 対象となる建築の様式

寝殿造り・書院造りの庭には夫々一応の形式があるが、その変化は漸变的である。然るに洋風建築の庭園は根本的に変えねばならぬ。特に高層建築に対してはその留意が必要であるが、対象建築に対する考慮だけではなく、四周環境との調和まで配慮しなければならない。後述する島根県庁庭園の石組みの如きである。

(3) 造園の規模

敷地面積の広狭が要件となることはいうまでもない。数坪の壺庭を数ヶの石でまとめることも容易でないが、江戸初期作庭の宮廷大庭園の設計・施工は更に困難があったであろう。

敷地の形状が矩形であるか、正方形であるかに従い、またその方位に従い作庭様式が異ってくる。官休庵露地（京都）は草庵様式であるが庵の東・南部をめぐる細長な庭が庵にマッチして作られている。日本式の庭は必ずしも面積の広さを要しない。

庭の accent 特に築山・池泉の占める面積は庭の全面積とのつりあいがとれていなければならない。鎌倉期創建とみなされている深田邸庭園（米子市）につき面積関係を調べる。

庭の敷地 670m²

池の面積（鶴島・亀島を含む）

114m² 0.17（全面積に対し）

鶴島の面積 21m² 0.18（池面積に対し）

亀島の面積 10m² 0.09（池面積に対し）

この庭園は小庭園として均整のとれた庭園である。上記数字はこの規模の作庭には、一つの指標とみなしうるのである。

築山の高さ、その steepness についても同様の検討が必要である。栗林園の飛來峯・芙蓉峯は紫雲山と対置の姿勢をかまえ、steep であることは好着想である。

(4) 素材の収集

作庭に当り定位置に一木を植え込み、一石を据え付けることは容易でない。更に溯ればこれら素材を捜し出し取捨選択することが重要である。権力者が作庭する場合、縁故者が由緒ある木石を献呈しているし、新庭築造に当っては古庭の木石を譲り受けて移すような場合があった。細川氏の名石藤戸石は初め二条城に移され、聚楽に移り、転じて三宝院に据付けられている。金照閣旅舎庭園は10年前に新築されたが、他の古庭を買収し移築されたのである。深田庭（米子市）の鶴島に使われている首石・羽石は天下の逸品といわれている。²⁶⁾ 特に羽石は鶴が羽をたたみうずくまっている状況を連想せしめるが、この横縞のある名石は奥日野鳥取県立自然公園地方に産する松皮石を掘り出してきたのであろう。素材の収集が如何に困難であるか認識しておかねばならぬ。

(5) 日本庭園が内包する幻想

整形尊重の洋式庭園と異り、日本庭園には独自の幻想・ロマネスクを内包している。作庭に当り用いられる蓬萊・須弥山・夜泊石・鯉魚石・鶴島・亀島、さては心字形・753・天地人・真行草等の字句は何れも道家・仏家の思想に基くものである。日本庭園を分類して三個となし、その一つに写意庭園が分立せしめられたこと（緒言参照）にも理由がある。唯物思想家はこれ等の表現を蔑視するであろうが、人間の本性・大衆老幼の間にはなお古庭園翹賞の価値は残されている。十和田観光は岩・島・滝等に適宜名付けて説明しているが、特別の文化人はともかく、大衆は素朴に受けとり recreation を享受している。

池泉廻遊の大庭園は別であるが適當規模の庭園の中央部に築かれた築山を文珠の浄土清涼山に見たて、この聖山を目指して渡るため架せられた橋を人生行路に於て此岸と彼岸をわかつ石橋（しゃっきょう）と考え、この橋に一步印するとき椎歌牧笛の声を耳朶にするが如き幻想が構想されている庭園を設計しては如何。すべからく日本風土に作庭する場合、幻想が必要である。古庭園と近代庭園を比較するとき、作庭精神の余韻の強弱が感ぜられる。ブルーノ・タウトの如く、日本庭園を愛好する外国人が現われることも理解できる。

(6) 作庭施工

作庭計画には幻想もよい。しかし施工に当っては現地に則しすべての accent, accessory の調和を再吟味しなければならない。pattern の基本に拠るべきは当然であるが、しかも現場で素材の現物を並べた上で抑揚の調和をはからなければならない。かかる点にかんがみ造園非学論が出るのかも知れないが、造園はあくまで科学の線に乗せねばならぬ。

木石を主とした作庭素材の研究にも興味が持たれるが、紙幅の関係があるので専門書²⁷⁾に譲ることとする。

作庭についての仕様・施工歩掛り²⁸⁾等についての検討も肝要であるがここでは省略する。

V. 批判造園学

造園学を観賞という点に限定するならば、観賞造園のみでこと足りるのであるが、観賞の域を一歩ふみこめば批判造園の領域が開かれて来る。作庭造園の領域で批判を要することは、前節各項の記述からも感受されるであろう。我が国造園の現段階には幾多の問題を内包し、古庭園・折衷庭園及び近代庭園三者の比較論も緊要な論題ではあるが、ここでは下記二問題を提起する。これらの批判は今後新たに作庭する場合、また旧庭園を補改修する場合、なんらかの示唆を与えるであろう。

1. 江戸時代作庭三大公園比較論

ここにいう三大公園とは栗林園・後楽園・兼六園である。(明治6年布告に基きこれらの庭園が県立公園と改名された関係があって、栗林園は今も栗林公園と呼ばれているが、この稿では他の二園との関連上栗林園と呼称する) これら三公園は江戸時代三藩主により各自意匠をこらして作庭されたので夫々特徴を持っているが、反面共通点を具えているので、京都三大名園(仙洞御所・桂・修学院)とは異った立場に立って観賞することができる。三園共池泉廻遊式庭園であるが、その立地条件は栗林は山麓に、後楽は平地に、兼六は丘陵上に作庭されていることが異なる。各公園の創設事情は次の通りである。

公園名	藩名	作庭の時期	面積
栗林園	讃岐藩	1673年着手 27年要した	49,000坪
後楽園	備前藩	1686年着手 20年要した	40,000坪
兼六園	加賀藩	文政末年から天保中頃まで	30,500坪

三公園共通している点は池泉・築山・曲水を持っていることである。兼六は江戸時代二里余の遠きから石材に穴をうがった管をつなぎあわせて引水し(辰巳用水)翠滝として高さ6.6米幅1.6米の生滝をかけていることが特徴である。この種庭園に池泉を欠くことは出来ないのであって、水底に張りつめられた玉石の姿もゆらぐが如くみゆる曲水の流れは、そぞろ王朝の昔をしのばしめる。

園池は後楽の簡素を採る。栗林は作庭期間が長いので、趣向がこらされている点はわかるが、池の様子は余りに複雑である。

庭木は栗林・兼六共に立派な松樹があって、園の accent の役目を果している。栗林の百石松の語りつたえは、ほほえまされる。中・小庭園例えば、西本願寺虎溪の庭などでは蘇鉄の植栽が accent の用をなしているが、この種大庭園では蘇鉄が林をなしていても松の古木に及ばないことがわかる。

三公園共園内に多くの亭・茶室を持っているが、兼六の夕顔亭を推さねばならぬ。

兼六の明治記念碑は種々なる理由があったであろうが、公園美の点からいうならば、プラスになっていない。後楽では郭沫若氏寄贈の鶴のケージ並びに碑の類は一切背景木立にかくされているが、園の広闊を示す為にはこの手法がよい。

栗林に対する紫雲山の関係は借景というよりも背景と考えたい。借景はある距離をおいた地点にある景観と考えるからである。万葉の色調を伝えている吉備中山の景観をみなれている筆者にとって、紫雲山の木立はもの足りなさを感じる。

借景・背景は後楽が有利である。近くに旭川の清流が流れ、操山の遠景・最近復旧した岡山城の城郭が借景・背景としてながめられるからである。

栗林は延宝元年松平藩主が作庭に着手して以来27年といい、または72年という歳月をかけられ更に大小の補修・改修が加えられて今日に及んでいるのであるが、県商品陳列所付近の近代的造園と併せ考察するとき、既に述べた造園の動態性を理解することができる(II-1参照)後楽の入口前庭には小花壇を設け、ブロンズ像を置き近代公園感覚の片鱗を示しているが、更に多少の広面積が得られるならば本庭の古庭園と対象に超近代的造園を計画し、コントラストの妙を示すことも一つの idea である。この場合栗林の漸変と対照すれば更に興味が持たれる。

廻遊式庭園は廻遊途上随所で景観を賞しうるしくみになっておるが、その景観中にも主眼となっている accent がある筈である。三公園につき相対的に拾ってみる。

(1) 栗林の主眼的景観は南湖・北湖の東側に富士をかたどって築かれている飛来峯・芙蓉峯からのながめである。この峯頂から紫雲山を背景に湖中浮ぶ島々、手入れのとどいた池畔の松、大小の庭木の間に隠頭する亭館をみおろす景観がよい。

(2) 後楽は操山を借景に蓬萊島の浮ぶ沢の池と唯心山を中心に広々とした芝ふがかもし出す広闊たる景観を延養亭の付近からながめるのがよい。中秋の夜、操山に登る月をながめながら野立を楽しむ市民達は、後楽が持つ都市公園としての独特の若さと新鮮さを感じるであろう。

栗林と後楽の二大公園が、国立公園である瀬戸内海によって近接の距離につらねられていることは、近傍に住み利用容易な造園観賞家にとって天の恵みであるといわねばならぬ。

(3) 兼六には琴ち灯籠を前景に霞ヶ池を望む好景観がある。この灯籠を批判する声もきくが、琴ちなき場合の紅葉の霞ヶ池、また雪の霞ヶ池は如何にうらさみしきものか。夕顔亭茶室の縁に立ってのひさご池に落ちる翠滝のながめは、他の二公園で味わえぬ魅力がある。

かくも市民に親しまれているこれら三公園に四季の季節をそれぞれ与えてみよう。三公園共春には特別のあこがれを持っておるので、共通にどの公園にも与えることにしよう。三公園の生れた順序からいって、夏は栗林に与えよう。栗林には夏の景物芙蓉の池を持っているからである。後楽に秋を与えることには問題がなからう。兼六には冬を与える。宝珠が見えなくなる程琴ちの笠に積雪する冬の景観は、栗林にも後楽にも望めない。造園の四要素水・土・木・石に雪を加えたい程である。

宮廷の名園写真には会心と思われる雪景色がない。それを兼六に期待することにする。

2. 枯山水石組みの問題

枯山水の石組みをめぐる造園家は古くから思考をこらしているが、直観した処その流れは竜安寺型と大仙院型に区分することができる。²⁹⁾ 即ち竜安寺は石庭のもつきびしさの内にも穏便さがあるが、大仙院は刺激的である。竜安寺は土塀によりかこまれた65坪の庭内に15石が配置

され、多くの石は虎の仔渡しの名が示すように臥石姿に用いられている。立っている数個の石も稜角少なく、腰低き座居の姿である。大仙院30坪の庭は生垣をめぐるし、竜安寺に比し温和な環境であるにもかかわらず肩をいからせきつ立している数多の尖頭石は、温和な座石が控えているにもかかわらず刺激的であると共に、威圧感をさえいだかしめる。これは禅の思想を示すのであろうか。

このような特性を持った両庭園の配石ではあるが、寺院の持つ静ひつな環境のもとで、土塀なり生垣でかこまれているので観る者をしていささか疑念をいだかせる程度にとどまらしている。然るにこのかこみが取り払われ、オープンな場所で枯山水方式の群石を散置せしめられると心ある者を一驚せしめるのも当然であろう。それには岸和田城庭園³⁰⁾と島根県庁庭園がある。両庭園共専門家の作庭であるからいわゆる津呂を得ているといえるが、枯山水石庭の庭のかこみを解くことは、作庭の根本につながる革新である。

岸和田城庭園の場合、城郭を背景にしているのでよき着想と思われ、腰低き落ちついた石が可なり用いられて居り、しかも群石散置のスペースが可なり広いので全体として安定感を与えるであろう。

島根県庁庭園の場合、庁舎は高層建築であるけれども城郭とは趣を異にする。群石散置の様相が異なり、立石の材質も異なるようである。もとより山陰は人情温和な風土であり、殊に松江市は穏和な都市であるので、立石群置の状況は強きにすぎぬであろうか。作庭には自然条件を考えると共に環境社会の関連をも考慮されねばならないと思われる。

最近石庭は庭にあらずとなし、竜安寺石庭の写意的な枯山水砂紋の上で横になってみたいといった極論までが出て来ている。³¹⁾ これも造園に対する一種の批判であるが、同時に反批判の要がある。造園学体系の中に批判造園学を組み込んだ趣旨も理解されよう。

結 言

a) 道家・仏家の思想、更には近代思想を通して造園学をみるとき、形而上学と形而下学との関係をはだ身にとらえることができる。所詮造園は考える輩といわれる人間の所産である。

b) 日本造園史の史的研究は文化価値論の展開に好個の題材を与えると共に、思想史の本質に更に接近せしめる。

c) 外国に誇示しうる日本古庭園を包摂しつつ、新時代に対処すべき日本造園の Gestalt を示し、世界造園の次元に立って日本造園の位置付けをはかった。従って日本造園の現段階の重心は、両者交互に作用しながら庭園より公園へ移行しつつあることを認識しなければならない。

d) 最近作庭されたカリフォルニア大学の UCLA Japanese Garden は日本色を克明にあらわし、³²⁾ 種々なる角度から多数の人々に依って観賞されている。傾斜地を巧妙に利用して二条の流れを設け、随所に生滝をかけた池泉廻遊式動的立体庭である。Katsura type の Bamboo fence 沢渡り、茶室、月見台等至れり、つくせりの日本調である。

明治初年欧米式の庭園を移入して新様式の作庭が行なわれるようになったのであるが、今や日本型庭園を外国に移出する時代となっている。日本文化を具象的に外国に示す為にはこれ程効果的なものはない。

e) 庭園観賞ブームの現況にかんがみ、観賞は古庭園を中心に行なわれているものと見なければならぬ。

f) 造園は学に非ずして術なりとの論がある。そのような点もあるが、本稿は飽くまで学として論じている。

g) 訳語には Landscape Architecture, Garten Gestaltung などがあるが、ここでは Landscape Gardening を使った。本稿の内容に吻合しない点もあるが今後の適訳を期待する。

h) 造園学体系を序説的に論じたのであるが、この稿ではなお不十分である。体系を志向される専門家に依って加除添削されんことを望む。
(1968. 12. 10 稿)

参 考 文 献

- 1) 7) 8) 19) 丹羽記念出版会編：日本文化としての庭園 (1968)
- 2) 川瀬一馬：禅と庭園 (1968)
- 3) 4) 29) 30) 福田和彦：枯山水の庭 (1967)
- 5) 岡崎文彬：図説造園大要
- 6) 26) 重森三玲：日本庭園史園鑑 (1938)
- 9) 13) 17) 23) 奈良本辰也：京都の庭 (1968)
- 10) 心：Vol. 21, Nr. 11 (1968)
- 11) ドナルド・キーン：中央公論976号 (1968)
- 12) 15) 本田欽三：お庭拝見 (1968)
- 14) 16) 三島・井上・大仏：宮廷の庭 I, II, III (1968)
- 18) 吉永義信：日本近代造園史 (1943)
- 20) 都市問題講座：都市計画 (1968)
- 21) 和辻哲郎：風土 (1967)
- 22) 石田繁之助：超高層ビル (1968)
- 24) 大仏次郎：奈良春日野 (1968)
- 25) 島田貫一郎：桂離宮 (1959)
- 27) 新光社編：ガーデンライフのたぐい
- 28) 関口鉄太郎：造園技術 (1966)
- 31) 野村尚吾：石庭庭に非ず (1968. 11. 28. 毎日)
- 32) D. Murphy: The UCLA Japanese Gardens